

予防処置としてA区はホルマリン500ppmの30分間を10日間隔、B区は硫酸銅1ppm + マゾテン0.25ppmの24時間薬浴を10日間隔、C区は硫酸銅1ppmの24時間薬浴を30日間隔に実施しD区は対照区として無処置とした。試験期間中に斃死魚がでた試験区では水槽の掃除をして一夜おいたあとあらたに試魚を收容し試験を再開した。試験期間は6月12日より7月10日まで91日間であった。

2) 結果と考察

無処置のD区で斃死魚が出た日は6月21日、7月16日、8月6日と3回あり、いずれもイソフエフキが早く感染して斃死、その3~5日後にハマフエフキが斃死した。A・B区は6月12日、6月22日、7月2日、7月12日、7月23日、8月2日、8月13日、8月25日の合計8回の薬浴を行なったがA区で6月24日、8月18日の2回イソフエフキが早く感染して斃死、いずれもその4日後にハマフエフキも斃死した。B区は試験期間中感染症状もみられず、したがって斃死魚はでていない。C区は6月12日、7月12日、8月13日の3回薬浴を行なったが斃死魚がでたのはD・A区よりやや遅く7月1日と8月20日にイソフエフキが感染し斃死した。ハマフエフキはすぐに取り揚げて0.5t水槽へ收容し硫酸銅1ppm + マゾテン0.25ppmの24時間薬浴を行なった結果、その後の経過は良好であった。感染初期の頃であれば上記の常法により治療効果があることが分った。

斃死前の魚の症状は口先から頭部にかけて体表がびらん症状を呈し、角膜の白濁がみられ遊泳緩慢である。斃死時間は明けがたが多く斃死魚は鰓の異常な粘液分泌が目立つ。

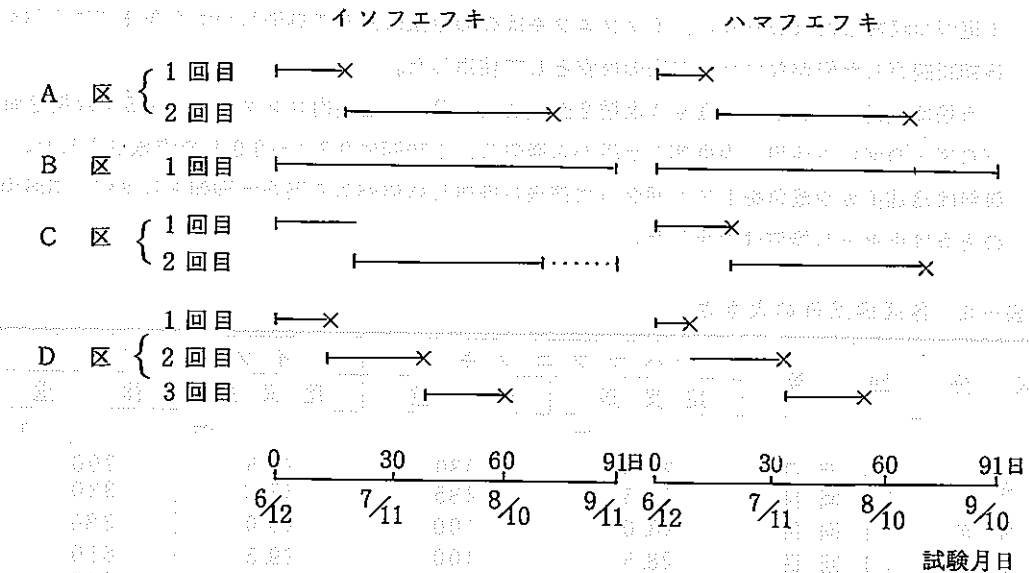


図3. 各区における予防処置の結果

注 X印は斃死を示す